

讀賣新聞

THE YOMIURI SHIMBUN

(23) 生活 12版

第44102号 (日刊) © 読売新聞社 1999年

1月29日 錦
1999年(平成11年)
発行所
読売新聞社
東京都千代田区大手町1-7-1
郵便番号 100-8055
電話 (03) 3242-1111

家庭 展開

1999年(平成11年) 1月29日(金曜日)

(第三種郵便物認可)



新幹線の改札口前に座り込む少女を撮った写真
台としての東京 (日大・児島知之さん=98年)

生活の変化映し出す



がらんとした公衆電話近くで撮った「携帯電話のアイロニー(皮肉)」(日大・浅沼伸介さん=98年)

ポケベルに違和感 (96) → 公衆電話前で携帯使用 (98)

「ライバハウスの熱狂やラテン系の音楽で心を満たす男性の部屋をとらえた写真もあった。生活が断片化しているからこそ、イベントやモノを通して心の安定を求めるようとする現代人の心が垣間見える」と、後藤さんは言う。

毎年の写真のうち30点前後を日大の秋の学園祭で発表。ホームページ (<http://www.wbs.nikkei-u.ac.jp/sei-daijinguoto.tokyo.htm>) でも公開している。

写真が語る現代の風景



社会学の授業
大文理学部の後藤範章助教授
(社会学) が担当するゼミの
並べて見ると、時代の変化が

学生が非常勤で教える法大、映し出される。特にそうした立正大の学生。現実離れしがちな学生に社会をよく観察させようと、1994年から授業の一環で指導したのがきっかけだ。街で撮った写真をテーマにした写真。コンピュータ撮影の数々と社会学的考察からは、ふだん見たくない「生活の変化」が浮かび上がってくる。

閉塞とした駅の公衆電話、改札口に座り込む少女……。カメラが切り取った都会の風景から現代人の心の様子をとらえようという試みを、東京の大学生たちが5年前から続けている。彼らが足で探し、現場写真の数々と社会学的考察から、ふだん見たくない「生活の変化」が浮かび上がってくる。

大学生が撮
東京 94-98

写真を撮っているのは、この5年間に学生が撮影した写真は、1500点近く。があったら、空気が伝わる。これが98年には、がらしげしげと眺める場面(96年)など、こうした機器に違和感があったら、空気が伝わる」と、後藤さん。ゼミ生の若者がポケットベルの表示を提出させていた。

しげしげと眺める場面(96年)など、こうした機器に違和感があったら、空気が伝わる」と、後藤さん。ゼミ生の若者がポケットベルの表示を提出させていた。

学生たちは敏感に反応している」と、後藤さん。ゼミ生の荒木俊之さん(22)も「知らないもののがいかに多いか、気づかされた」と言う。

このほか、河原で等間隔に座るカップルたち(95年)、午前2時のディスカウントショップ(98年)、新幹線で東京に遊びに来て帰る地方の少女(同)など、現代人の生活の様々な場面が記録されている。

「ライバハウスの熱狂やラテン系の音楽で心を満たす男性の部屋をとらえた写真もあった。生活が断片化しているからこそ、イベントやモノを通して心の安定を求めるようとする現代人の心が垣間見える」と、後藤さんは言う。

毎年の写真のうち30点前後を日大の秋の学園祭で発表。ホームページ (<http://www.wbs.nikkei-u.ac.jp/sei-daijinguoto.tokyo.htm>) でも公開している。